

継母の心得 8

Character



◆**ウイーンズ**
枢機卿。なにか企んでいるようだが……

◆**オリヴァー**
イザベルの弟で、シモンズ伯爵家の跡継ぎ。しっかり者だが、少々毒舌。

◆**フロレンス**
オリヴァーの補佐を務めるドニースの娘。実は聖女。



◆**テオバルド**
ダイバイン公爵家の当主で、イザベルの夫。極度の女嫌いだったが、今はイザベルを溺愛している。

◆**イザベル**
マンガ「氷雪の英雄と聖光の宝玉」に出てくる悪辣継母キャラとして転生した元日本人。前世の知識を活用して次々と新商品を作り出し、この世界に旋風を巻き起こしている。

◆**イーニラス**
グランニッシュ帝国第二皇子。ノアの親友。

◆**ノア**
ダイバイン公爵家の跡継ぎ。イザベルのことが大好き。

目次

継母の心得 8

7

悪夢を食べるバク

263

継母の心得 8

プロローグ

「奥様、明日の朝は『妖精のダンス』が見られるかもしれませんよ」

夜、わたくしの愛息ノアと、ペーちゃんことフェリクス——クレオ大司教のお孫さんで、エンプティという犯罪組織に狙われている赤ちゃんを寝かしつけている時、カーテンを閉めていた侍女長のマディソンが、空を見上げて嬉しそうに教えてくれた。

よく晴れた冬の早朝——それは、ディバイン公爵家に嫁いできてから、わたくし、イザベル・ドーラ・ディバインが大好きになった時間。その時間にごく稀まれに見られる『妖精のダンス』は、まるで無数の宝石が舞っているかのように、公爵家の庭を輝かせる。このディバイン公爵領を代表する風物詩で、早起きして見る価値のあるイベントだった。

マディソンの言うことはとてもよく当たるので、わたくしは翌朝が楽しみになった。

「おかあさま、キラキラ、きれいなね」

「ちあつ、ちあー！」

先日むかし僅か四歳で地下迷宮を探検し、一回り成長した息子は、ペーちゃんを抱っこし、窓際で『妖精のダンス』を見て目を輝かせている。

「そうですね。何度見ても見飽きない美しさですわ」

やっぱりマディソンの予想どおり、『妖精のダンス』が発生しましたわ。

そう、『妖精のダンス』とは、ダイヤモンドダストのこと。よく晴れた朝など、気温がマイナス十度以下の時に、宙を舞う氷の結晶が日光に反射して輝いて見えるのだ。特に公爵家の庭では、虹色に見えることがあり、そこにノアがいると、天使が舞い降りたのかと思うほど美しい景色になった。

「ペーちゃん、キラキラ、よーせーのダンスよ」

「あー！」

去年、わたくしがノアに教えてあげたことを、今度はノアがペーちゃんに教えてあげている。それが微笑ましく、ノア付きの侍女であるカミラ、そしてわたくし付きの侍女のミランダと目を合わせ、頷き合った。

こんな可愛いやり取りをする子供たちを見られるなら、雪の積もった庭へ飛び出しても、きっと寒さなんて感じませんわ。

『よばれて、でてきた、よーせーアカ！』

『よーせーのアオも、わすれたらダメ!!』

妖精のダンスって言っている時点で、出てくると思いましたがのよね。

いつの間にかイーニアス殿下、そしてノアとバディ契約を結び、さらに幸せパワーで体長三十センチほどに急成長したキノコ帽子の妖精、アカとアオ。光の妖精である二人は、おもちゃと美味しいおやつ、そして楽しいことが大好きだ。

『よーせーのダンス、ほんもの、みたーい。そんなこえ、きこえた！』

誰もそんなことは言っていないわよ。

『そんなこえに、おこたえして!!』

『『レッツ、ダンシング!!』』

ロマンチックなダイヤモンドダストの朝が、突如キノコ妖精の楽しいダンスへと変わってしまいましたわ。

「わあ！ アカとアオ、ダンスおじよーずね！」

ペーちゃんを抱っこしたまま、ノアまで可愛いダンスを始める始末。

フツッ、一気に賑やかになりましたわね。

『ベル、チロモ、ダンスデキルノ〜』

わたくしの契約妖精のチロまで踊り始めましたわ。

しばらく王都のタウンハウスにいるつもりだったけれど——こんな素敵な景色が見られたのだから、皇后様の転移能力で領地へ連れて帰ってもらってよかった。

「によあ？ かあた？」

ペーちゃんはキョトンとしておりますが、たまにはこんな賑やかな朝も素敵ですわよね。

「さあ、ダンスが終わったら、美味しい朝ご飯を食べましょう！ お父様がお腹を鳴らして待っておりますわ」

わたくしの旦那様で、氷の大公と呼ばれる超絶美形のテオバルド様——テオ様が、お腹を鳴らして待っているなんて想像もつきませんけれど、子供たちにはこう伝えた方がわかりやすいでしょう。

「おとうさま、ぼんぼんくう、してる？」

「ぐうー！」

うふふ、と笑うノアと、自分のお腹を押さえるペーちゃんの可愛いこと！

「ええ。きつとぐうぐう鳴っておりますわね」

「うふふっ、おとうさま、ペコペコね」

ノアはわたくしが冗談を言っているとわかっているのだろう、悪戯いたずらっ子のような表情で笑っている。

「ペーちゃ、みよー！」

あらあら、ペーちゃんもお腹ペコペコですね！

ノアと顔を見合わせ、わたくしたちは声を出して笑い合ったのだった。

第一章 ペーちゃんの鍵

食堂で待つていたテオ様を見た途端、もう一度ノアと二人で笑ってしまい、テオ様が呆気に取られている。そこで、ペーちゃんが――

「ペーちゃ、いっつちよ！」

とテオ様に仲間意識を伝えたので、カミラが吹き出してしまいましたの。わたくしも声に出して笑ってしまいましたわ。

テオ様はなんとも言いがたい表情になったのだけれど、ペーちゃんにはそれが恐ろしい顔に見えるのだろう。大泣きしてしまい、食堂は大騒ぎだった。

「坊ちゃま、お子様の前でそのように恐ろしい顔をなさってはなりません」というマディソンの説教に、たじたじになる珍しいテオ様を見られたので、わたくしは幸運でしたけれどね。



「最近『おもちゃの宝箱』も、スタッフに任せきりでしたけれど、新作のおもちゃを次々と開発

して、貴族だけでなく一般の皆様にも人気なのですって」

朝食後、わたくしが創設した育児グッズ専門店『おもちゃの宝箱』のスタッフたちの日誌を読みながらミランダと話しているうちに、創作意欲がむくむくと湧いてくる。

「久しぶりに、新しいおもちゃを考えようかしら！」

その一言にいの一番に反応したのが、愛息のノアだった。

「おかあさま、あたらしい、おもちゃ？」

「もちや！」

あらあら、ノアもペーちゃんもそんなに期待するような目で見て。

二人の反応にクスクス笑いながら、それじゃあ、期待にこたえるとしますか！ と、新しいおもちゃ開発に取りかかる。

新たなおもちゃはなにがいいかしら、と考えて、ふと、以前弟のオリヴァーから『ゴム』の開発に成功したと報告をもったことを思い出した。

「ゴム……」

わたくしの頭の中を、前世の色々なゴム製品が駆け巡る。輪ゴムに始まり、車のタイヤから医療機器まで。わたくしの実家であるシモンズ伯爵家でも現在、樹脂とあわせて様々なものを開発しているところなのだ。それらが完成し、人々が便利に使用している未来を想像すると楽しくなってくる。

ウキウキと心を高揚させていたその時――

「おかあさま、ごむ、えほんの！」

わたくしの天使がドレスの裾を握り、見上げてきましたのよ。しかもキラキラした目で！
「そうですわね。ノアが大好きな絵本にも出てきますわよね」

「はい！ わたし、びゅーって、ポーンして、どかぁん！ だいしゅき！」

ノアったら、大興奮で大好きな絵本のことを語っていますわ。

「ふふっ、ゴムはね、絵本のようになるだけじゃありませんのよ」

「えほん、なるだけ、ない？」

小首を傾げるノアに、ゴムのすごいところを教えようと口を開いたちようどその時、ノアが最高に喜んでくれそうなアイデアを思いついた。

アレなら、そう時間もかからず作れるし、ノアが楽しんでくれるのではないかしら。

「お母様はゴムで、ノアが喜ぶおもちゃを作りますわね！」

開発途中のものに手を加えるだけだったので、僅か数日で新たなおもちゃをいくつか生み出すことに成功した。

「フフフ……、わたくしの自信作が完成しましたわ！」

これで遊ぶ子供たちの顔を想像すると、疲れも吹っ飛びますわね。

と、そこへ扉をノックする音が聞こえた。返事をするに静かに入ってきたのは、わたくし付きの侍女であるミランダだ。

「奥様、旦那様より言伝がございます」

研究室に入ってくるなり、丁寧な口調でそう言われ、作業の手を止める。

「え、テオ様から？」

「はい。『今すぐ休憩しなければ、研究室の鍵を預かることになるだろう』とのことですよ」

怒っていらっしやる〜！ そういえば、ここ数日、朝から晩まで研究室に籠もりきりで、テオ様と会話らしい会話もしていないような……

「す、すぐに休憩しますわ！」

鍵を取り上げられてはたまらない、と研究室を飛び出す。

「奥様、旦那様はテラスで奥様をお待ちです。急がぬように、とのことでした」

大急ぎで夫のもとに向かおうと踏み出した時、ミランダにそう告げられて、前のめりの体勢のまま動きを止める。

テオ様、わたくしが慌てて向かうこともお見通しですね。

「ゴホンッ、わかりましたわ……」

何事もなかったように姿勢を正し、静々と歩き出した。

午後の公爵邸は酷く静かだ。ティータイムの時間よりも少しだけ早いので、ノアは勉強中だろう

し、ペーちゃんはお昼寝中かもしれない。

夫婦水入らずのティータイムも久しぶりですわ。

少しワクワクしながらテラスに出ると、お気に入りのソファに座り、優雅にティーカップを傾けているテオ様が目に入る。その横顔が美しく、毎回見惚れてしまうのだ。

なんて絵になる人なのかしら。

テオ様の熱烈なファンである皇后様がいれば、黄色い声を上げているに違いありませんわ——などと想像して、つい笑ってしまった。それが耳に届いたのか、テオ様はわたくしに気付き立ち上がると、手を差し出してくれる。

「ベル、今度はなにを開発していた？ 君は夢中になると、身体が弱いことも、妊娠していることも忘れるようだ」

頑丈とは言えないものの、一応健康体なのだが……黒蝶花の一件——毒を飲んで倒れてから、テオ様にはわたくしの身体が弱いと刷り込まれているらしい。

嫁いできた当初は、嫌味を言われたりもしたのですが、最近は甘い言葉ばかりのテオ様ですもの。このような皮肉めいた物言いは久々ですわね。

「テオ様、心配をおかけして申し訳ありませんわ。つい時間が経つのを忘れてしまつて……」

差し出された手を取り、夫の隣に座ると、「無茶はしないでくれ」と、じっと見つめられる。

「はい。ですがわたくし、すごいおもちゃを開発しましたのよ！」

「……はあ」

溜め息を吐かれてしまいましたわ。

「それで、今回はどんなものを開発したんだ」

どうせヤバイものなんだろう、とでも言いたげな表情は見ぬふりをして、わたくしはテオ様に説明しましたのよ。

「まずは定番の『風船』ですわ！」

ゴムといたらコレは外せない。膨らませると、空気の流れによってフワフワと不規則な動きをする面白いおもちゃ。ペーちゃんも遊べるし、ノアは絶対喜んでくれるだろう。

「それと、ゴムボールに、ゴムで作った動物の人形もありますの！」

外で遊ぶもよし、お風呂で浮かべるも良しのゴムのおもちゃは、最近ますます活発になったノアにピッタリではないだろうか。子供たちの喜ぶ顔が楽しみですわ。

「……開発記録とサンプルを貰えるか」

「もちろんですわ！ あ、ゴムといえば、以前、馬車のタイヤもゴム製のものにしましたけれど、もう少し厚みと幅を大きくして、溝を深く、切れ込みを細かくすればスタッドレスタイヤ……いえ、凍結路や積雪路も走れる馬車になるのではないかと、思いますの。それで模型を作ってみたのですけれど……」

元がパプロの木の樹液のそれは、低温にも高温にも強いゴムなのだ。溝や切れ込みの工夫で、寒



さ厳しいデイバイン公爵領の冬でも馬車が走らせられるのではないか——そうテオ様に説明すると、当然おもちやよりも食い付きが良かった。

結局、久々の二人きりのティータイムは、研究発表会に変わってしまったのだ。

その後ノアとペーちゃんも合流したので、早速新作のおもちやをお披露目すると、わたくしの想像を遥かに超える喜びぶりで、遊んでくれた。

「ペーちゃん、ふーせん、とんでった!」

「によお! うあつ、うあ!」

「そうね! フワフワね!」

ふふつ、二人とも大はしゃぎですわ。

特にお気に入りは風船のようで、庭で仲良く遊んでいたのだけれど……

「ワンツ」

初めて見た風船にはしゃいだのは、子供たちだけではなかったみたい。

「あ、じゅーく!」

「あゝ、うーきゅ!」

風船が地面に落ちた瞬間、我が家の番犬デュークが物凄い勢いで走ってきて、転がっていた風船にかぶりついたではないか!

そうなるも当然……

——パアアアン!!

呆気なく割れた風船に、子供たちは泣きじゃくり、犯人……いえ、犯犬のデュークは耳をぺたんと伏せて、尻尾を股の間に巻き込んだ。大きな音が怖かったのか、相棒のナラの怒りが怖かったのか、はたまた子供たちを泣かせてしまったことが悲しかったのか。その全てかもしれない。

「我が家のワンちゃん、表情豊かですわね」

わたくしは子供たちを慰めながら、ナラとデュークに感心していたのだった。

「……ベルが来てから、毎日が大騒ぎだな」

フツと表情を和らげたテオ様が、小さくなにかを呟く。私には聞き取れなかったけれど、ウォルトの耳には届いていたようで、微笑みを浮かべ頷いている。二人は言葉を交わすことも、顔を合わせることもないのに、通じ合っているかのようだ。

まさに親友、という感じで、素敵ですわね。

とにかく、こうして子供たちに好評を得た新おもちゃたちは、満を持して店頭に並んだのだ。

冬真つ只中のデイバイン公爵領都では、積雪もあるため、冬は家に籠もるのが普通だった。だが今年には道に火の魔石を設置し、定期的な除雪作業やその他の改善もあり、外に出ることが可能になった。そんな中、『おもちゃの宝箱』本店で発売したゴム製の新作おもちゃは飛ぶように売れ、あつという間に売り切れてしまうほどだった。

「まさか、ヘアアクセサリーにあんなに行列ができるとは思いませんでしたわ」

ノアのために開発したボールや風船はもちろん、ゴムでできた様々な動物のフィギュアも人気なのだが、女の子用に作ったシュシュやリボン、花、宝石などがついた髪ゴムが庶民から貴族まで受け入れられ、真冬だというのに、長蛇の列を作ったのだ。

「髪ゴムは画期的です！ 今までリボンや紐で結ぶか、飾りで留めるか、べつとべとの整髪料で固めるしかなかった世界に、簡単に髪を纏めることができるものが登場したんですから！」

「これでこれまでよりも複雑な髪形もできるようになりますし、確実に革命が起きます！」

すごい賑わいでしたわね、なんて笑っていたら、お店のスタッフたちに、興奮気味に力説されました。

「さすが奥様です。またしても世界に革命を起こされるのですね」

わたくしの後ろで拍手をしているミランダは、もはや言っていることがおかしい。

「帝都支店で販売を開始したら、奥様の革命はもう、誰にも止められないでしょう」

革命軍みたいに言わないでください!!

ミランダは本気で言っているものだから、頭を抱えなくなった。

ヘアアクセサリーは後日帝都支店で販売が開始されるのだが、それが第一次ヘアアクセサリー革命と呼ばれるようになるなんて、この時のわたくしは想像もしなかったのだ。

「ゴム製品は柔らかく、お風呂に入れて浮かべたり、ボールにして投げたりもできる上、動物シリーズはインテリアとしてもおしゃれです。触り心地もぶにぶにしています、最高なのです」
支店長の張り切る声が聞こえてくる。明日から販売される商品を、スタッフに説明している真っ最中らしい。

「風船は息を入れて膨らませるとボールのようになりますが、軽くふわふわしていて、不思議なおもちゃです。本店ではゴム製品の中でもこれが一番人気で、あつという間に売り切れました」

スタッフたちは支店長の言葉に頷きつつ、実際に触ったり、膨らませたりしながら、楽しそうに意見交換をしている。その後方にある、帝都支店名物の巨大滑り台の着地場はボールプールになっている。柔らかいボールが心地よく、子供たちが喜ぶ顔が想像できる。これは支店の皆が意見を出し合って考えたものだ。

「風船は一個ずつの個別売りだから、会計横に置いた方がわかりやすいわよね」

「店長、注目商品ですし、店舗入り口のコーナーにも置きますか？」

「うーん……動物シリーズは置いてもいいけど、風船は入り口のコーナーにはちよつとねえ……あ、

注目商品のコーナーを一角に作って、風船を膨らませたものをサンプルとして置いて、ポップを付けたらどうかしら？」

「それ、いいっすね！ 膨らんでないものは、どうやって遊ぶかもわからないですし、遊び方を描いたポップを貼り付けとくっす！」

明日の発売に向けて、閉店後、ディスプレイを変えていく。皆生き生きと働いているし、自分で考えたものを店に反映できるからか、やる気が違う。もう、前の職場には戻れない、と誰もが思っていた。

「はあ……この動物シリーズ、ぶにぶに感がたまらん……っ」

変態のようなセリフを吐きながら、動物シリーズの犬をぶにぶに握っている女性店員。後ろで男性店員がドン引きしているが、全く気にしない猛者である。

「こーら、サボってないで入り口に並べてちょうだい」

「はーい！ 店長、これ社割で買えますか？ 欲しいです！」

「ゴム製品は在庫があまり確保できていないから、売れ行き次第よ」

「やっぱりかあ。シモンズ伯爵家、ゴム製品たくさん作ってくれないかなあ」

「はいはい。お喋りしてないで、仕事しましょう」

「はーい」

気持ちはよくわかる。あの感触は、絶対ストレス発散になる！ と、スタッフ全員が思っていた

が、作業する手は止めなかった。

——翌日。

「店長！ 風船が……っ、風船が足りません！」

「ボールと動物シリーズも残り僅かです!!」

「他のおもちゃもついで買いされ、少なくなっています！」

新商品の口コミは想像を絶する速さで帝都を駆け巡り、大勢の客が、『おもちゃの宝箱』に押しかけた。さすがに一日で完売するとは誰も予想していなかった上に、他のおもちゃまで一緒に売れてしまったものだから、店はてんでこ舞いだ。

「足りない！ 商品が全く足りない！ 今すぐベル商会に連絡してえ！」

これが『ゴム製品おもちゃショック』の始まりである。ヘアアクセサリー革命と同時に起こったそれは、帝都支店のスタッフにトラウマを植え付けた。オムツ販売時に起きた『オムツショック事件』以来の革命である。

「イザベル様、またしてもやってくれたわね！」

これが巡り巡って、マルグレーテ皇后の仕事量をも増やすことになるのだが、イザベル本人はそんなこと想像すらしていなかったのは言うまでもない。



『おもちゃの宝箱』で販売を始めた新たなおもちゃが好評で嬉しいですわ。

わたくしは機嫌よく、ティーカップを口に運ぶ。

今日は皇后様とイーニアス殿下がデイバイン公爵領に遊びに来られている。

はしゃぐ子供たちを眺めながら、ママ友会と称し、皇后様とゆつくりお茶をしているのだ。

テオ様は仕事で忙しいので、若干後ろめたい気持ちもありますけれど、たまには、ね。にしても、いつもテオ様以上にお忙しい皇后様は、お仕事、大丈夫なのかしら？

などと思っていたら、毎日ワーカーホリック並みに働いているから今日は休めと皇帝陛下から言いつけられたそうさ。

皇帝陛下は相変わらず皇后様を大切にされておりますのね。皇后様もなんだかんだ、皇帝陛下を氣遣っておりますし、素敵なご夫婦ですわ。

皇后様がお土産に持ってきてくださった焼き菓子を摘まみ、「美味しいですわ！」なんてポロリとこぼすと、この焼き菓子は帝都の庶民街にある、行列のできる店のものなのだ、と教えてくださるではないか。

「まあ！ もしかして、以前わたくしの誕生日に殿下がくださった、あの美味しいマドレーヌの店もののかしら！」

「イザベル様、よく覚えているわね。そうよ。イーニアスがあの店の菓子を持っていききたいというものだから、二人で朝から行列に並んできたわ！」

「ええ!？」

皇后様と殿下が庶民街の店に、また並んで……!？」

話を聞いて卒倒しそうになる。

このご家族は、アグレッツシブすぎますわ……

「つて、あら？　ということ、今日はもう、転移魔法の上限を使い切りましたの？」

皇后様の転移魔法は一日二回が限度だったはず……。マドレーヌのお店と、公爵領で使い切っておりますわ。

「いやねえ、イザベル様。今日はイーニアスの転移魔法で来たのよ」

そういえば、イーニアス殿下も妖精のアカと契約して転移魔法を使えるようになったのでしたわ。

「まあ、そうでしたのね」

「今日はアカの方じゃなく、あの珍獣の力を使用して転移を試してみたのよ」

ああ、地下迷宮で会ったというあのオウムの！　イーニアス殿下はオウムと契約して焔ほむらの神殿の管理者になり、オウムの力を自分の力として使えるようになりましたのよね。

「それは……大丈夫でしたの？」

「暴走の可能性はないというし、新たな力なんて使ってみないと、危険か危険じゃないかなんてわ

からないでしょう？」

なにかあった時に初めて使うものなんて大抵失敗するものよ、と皇后様が言う。

どうやらイーニアス殿下が自分の持つ能力に慣れるよう色々な状況で使わせているらしい。

さすが皇后様ですわ。特に皇族は有事に備えておかなければいけませんものね。ノアだって、誘拐された時、テオ様の訓練のおかげで助かったのですもの。

姿勢を正す思いで皇后様の話を聞いていた時だ。

『アス、みて！　かぎー!』

「アカ、そのかぎ、どこにあったのだ？」

妖精のアカが見せた鍵を見て、イーニアス殿下が首を傾げる。

『ペーが、くび、ぶらさげてた!』

『かりたー!!』

えー!?　それはペーちゃんがクレオ大司教から貰って、大事にしている鍵ですわよね!？」

「ペーちゃんが、かしてくれたのか？」

イーニアス殿下がアカたちに確認しているのだけど、ペーちゃんには妖精の姿は見えませんし、声も聞こえませんわ。きつと、悪戯いたづらっ子なキノコ妖精たちが、勝手に拝借してしまったのだわ。

『きれーだから、みせてもらった!』

『ちよつとだけ!!』

これは、お説教が必要かしら……そう思っていたのだけれど——
「アカ、アオ、そのかぎは、ペーちゃんがとでもだいじにしている。それが、なくなっているとわかったら、とつてもかなしい。だから、すぐにかえしてあげよう」

イーニアス殿下が妖精たちに優しく諭す^{さと}ではないか。

「しかもどうしてダメなのか、キノコ妖精たちが理解できるように、きちんと教えてあげておられますのね」

感心してやり取りを見ていると、皇后様は頷いてわたくしに言った。

「あの程度の困ったちゃんを制御できないようでは、皇帝になんてとでもなれないでしょう」

厳しい言葉を言いながらも、イーニアス殿下を誇らしげに見守っている。

「にゃ!？」

その時、おもちゃに夢中になっていたペーちゃんが、首からぶら下げていた鍵がなくなっていることに気付き、猫の鳴き声のような声を上げた。

「アカ、アオ、ペーちゃんにあやまろう」

『アカ、ごめんなさい、する!』

『アオも、ごめんなさいする!!』

妖精たちが謝ったとしても、ペーちゃんには伝わらないのだが、イーニアス殿下は「ふたりとも、えらいぞ」と優しい笑顔を向け、ペーちゃんに鍵を差し出した。

「ようせいのアカとアオが、ペーちゃんのだいじなかぎを、かっぺにかりてしまった。すまぬ」
自分の尻尾を追いかける犬のように、くるくると回り、鍵を探していたペーちゃんに、イーニアス殿下が謝罪する。

まあっ、妖精の主として、謝罪されていますのね。この方は、なんて真摯で、素直で、優しい方なのかしら。

「あちゅ、ぺえちゃ、ちに、つて、にゃーい」

「アスでんか、ペーちゃん、きにしてないって、いつてるのよ」

『ペー、きにしてない! よかった!』

『アオ、わるくなかった!!』

ノアはすっかりペーちゃんの通訳ですわね。妖精たちは反省なさい。

すかさずフロアに入るノアの姿に、未来の有能な公爵の姿を見て、うちの子、なんて有能ですの! と親馬鹿なことを考えていると、皇后様の表情が曇った。

「イザベル様、皇族はながあつても頭を下げてはならないのよ」

だから、あの行動は皇族として失格なのだ、と皇后様は言う。

「皇后様、ですがわたくしは、ああして友達のために頭を下げられるイーニアス殿下を、好ましく思いますわ」

「ええ。アタシもね、母親として誇らしく思うわ。ただ、あの優しさが、民を危険に晒^{さら}す場合もあ

るのよ」

王は、民と国を守るために生きるべきであり、民の幸福を第一に考えるべきである。それはなんと重い責務なのだろう。イーニ阿斯殿下は、あの小さな肩に、重すぎる責任を負い、それを当然と受け止めていらっしやるのだけわ。

「皇后様、わたくし、皇族の責を軽く考えていたようすわ。申し訳ありません」

「ふふっ、イザベル様ったら真面目ねえ。いいのよ。今はそんな堅苦しい場じゃないもの。それに、アタシはイーニアスやアタシを皇族としてではなく、友人として迎えてくれるあなたが好きなの」
皇后様ったら、嬉しいことを言ってますわね。

「わたくしも、友人として接してくださいさるあなた様が好きですわ！」

わたくしたちは顔を見合わせ、笑い合う。すると、ペーちゃんがわたくしたちをキョトンとした表情で見たあと、イーニ阿斯殿下に向かって言ったのだ。

「ぺえちゃ、あちゅ、だあ、ちゅつき！」

「ペーちゃん、アスでんか、だいすきっつて！」

まあ！ もしかして、わたくしたちの真似をしましたの？

「うむ、わたしも、ペーちゃんがだいすきだ！」

「わたしも、アスでんかと、ペーちゃん、だいすきよ！」

「っ！ ペえちゃ、によあ、みよっ、だあ、ちゅつき！」

今のはわかりましたわ。「ペーちゃんは、ノアも大好き」って言いましたのね。

『アカも、アスとノアとペー、だいすき！』

『アオも!! あと、おやつと、おもちゃ、だいすき!!』

アカとアオの大好きも、ノアとイーニ阿斯殿下はニコニコしながら聞いている。可愛すぎる子供たちのやり取りを、顔をほころばせながら眺めていると――

『ペーのかぎ、どこのかぎ?』

とアカが言い出したではないか。そういえば……と子供たちの会話に耳をすます。皇后様も興味があるのか、同じように耳を傾けていた。

イーニ阿斯殿下が、アカの言葉をペーちゃんに伝える。

「にや? ちょーこ、みやあ?」

ペーちゃんの言葉が、猫の鳴き声にしか聞こえせんわ。可愛いからいいのだけれど。

「きよーこ? の、ま、かもつて」

京子の間? 今日子の間? いやいや、きょうこって誰ですの!?

「ふむ、きょうこの、まか」

ああっ、教皇の間!

「ちよっと、ペーちゃんがなんで教皇の間の鍵を持っているのよ!? しかも、赤ん坊が教皇の間の鍵って理解しているのも変でしょう!」

皇后様がイーニラス殿下の言葉にツッコんだ。

そうですわよね。でもペーちゃんは、クレオ大司教曰く、『神託の子』。つまり、公にはなっていないけれど、現教皇ですよ。そういうわけで鍵を持っているのはある意味正当な権利とも言えますわ。

「ペーちゃん、きよーこのま、なあに？」

ノアは教皇の間とはなにかが気になるようで、ペーちゃんに聞いているのだけれど、さすがにそこまでわからないのではないかしら？

「ちよーこ、あかち、ちゆえ、うびあ、ちよお……あみによ、ちよ、あう！」

「きよーこの、あかし？ つえとゆびわと、かみのしょ、あるところ？」

ペーちゃんったら、理解しているところか、なにがあるかまで把握しておりますの!? というか、教皇の証である、杖と指輪と神の書があるって……

「超重要な鍵ですわ！」

「なんでそんなものを赤ん坊が持っているのよ!？」

わたくしと皇后様は、同時に叫んでおりましたの。

「皇后様、ペーちゃんは教皇殿下ですので、クレオ大司教が持たせたのかもしれないわ」

まあ、だとしても赤ちゃんにそんな大事な鍵を持たせてもいいのか疑問はありますけれど……そんなことを思っていたら、皇后様が「ふあ!？」と可愛らしい声を上げるではないか。

「きよ、きよ……!？」

「皇后様、珍獣の真似ですの？」

「違うわよ！ ペーちゃんは大司教の孫でしょう!? 教皇ってどういうこと!？」

「大司教から聞いているではありませんか？ ペーちゃんは七十年ほど前、聖女様のご神託を受けた『神託の子』だと」

「はあ!？ アタシは、ペーちゃんが大司教の後継者として育てられていることしか聞いてないわよ!? 神託の子!？」

皇后様はどうやら一番大事なところを聞かされていないかったらしい。

「『夜の帳が下りる時、全てを見通す瞳持つ赤子立つ。その者未来を知り、信心なる者を導く』という神託だったらしいのですけれど」

「その神託自体は知っているわよ！ だけどそれがペーちゃんだなんて……っ、あのあどけない赤ちゃんが、教皇ですって……?？」

頭を抱える皇后様に、わたくしは以前から思っていたことを口にする。

「可愛い教皇殿下ですわよね」

「イザベル様、あなた時々、ド天然発言かますわよね」

皇后様に呆れた目で見られてしまいましたわ。最近テオ様と皇后様のわたくしを見る目が、似てきたと思うのは気のせいかしら。

「確か七十年前の神託があったせいで、教皇がずっと空席のままなのよね」

「はい。神託の内容はともかく、神託の子を、教会が捜していることは一般人から王侯貴族まで知る、有名な話ですわ」

あら？ もしかして五歳の時におこなう祝福の儀は、神託の子を見つけるために始めたのかしら？ 神託が下りてから必ず教会で祝福の儀をするようになったと、最近教会の歴史書で読んだ記憶が……

「聖女が生まれなくなって久しいわ。原因が教会にあるのではないか、教会が神に見放されたのではないかという憶測がいつの間にか民の間で広まって、教会の威信が失墜しつつある昨今、神託の子を見つけ出し、教皇の位に据えるというのは、教会にとってはなんと少しでも叶えたいことよ。ペーちゃんが神託の子なら何故、大司教は公の場に出さないのかしら……」

「それは、ペーちゃんが赤ちゃんだからではありませんの？ 祝福の儀で魔法が使用できるようにするのは五歳からですし、教皇としてお披露目するのは五歳がいいとお考えなのかと……」

皇后様の疑問はわたくしも持ったが、大司教もテオ様もそこには触れなかった。なにか言えない理由があるのか、それとも当たり前すぎて話さなかっただけなのか。後者であれば、幼すぎるからという理由だろう。

「そうね。年齢もあるのだろうけど……」

皇后様は目を伏せて少し考えるようなそぶりをすると、ゆっくり顔を上げてわたくしを見た。

「ねえ、イザベル様は教会についてどれくらい知っているかしら？」

「教会についてですか？ 主神として創造神様をお祀りし、その下に火、水、風、土、光、闇の六神が存在しますわ。グランニッシュ帝国は、皇帝が代々火の神、焔神より加護をいただいておりますので、帝都の教会では創造神と焔神、ドイツイン公爵家は代々水と風の神より加護をいただいておりますので、公爵領では主神の他に主にその二神が祀られておりますわね」

つまり、教会は主に創造神様を祀り、他六神に関しては、個々で好きな神を信仰する、という感じだ。それぞれの分教があるので、日本の神社に近いのかもしれない。

一般庶民は家に祭壇を作り、個々で祈るのが普通なので、それもあつてか教会に足を運ぶ人が減っているのも事実だ。だからこそ、色んな行事で足を運んでもらえるよう、教会側も考えている。日本の七五三や初詣などもそうだろう。

この世界の場合、祝福の儀をすることで魔法を使えるようになる、という目に見えるご利益があるので、衰退してきているとはいえ未だ教会の力は大きいんですね。

「そうね。教会は世界中にあつて、その全ての国で、創造神と六神が信仰されている。そして、教会の総本山は、このグランニッシュ帝国の帝都にあるわ」

周辺諸国を統一し、グランニッシュ帝国が誕生した千五百年前、教会の総本山は帝国とされたのだ。

「皇后様、わたくしも一般的な知識でしたらございますけど……もしかして、一般人が知ってはいけ

ないことを、お話しされる気ですの!」

「あら、イザベル様は一般人じゃないでしょう」

皇后様はニヤリと含みのある笑い方をして、また口を開くではないか。わたくし、そういった重要機密は知りたくありませんわ!

「総本山の国の皇后であるアタシには、教会に関しての色々な情報が入ってくるわけよ」
でしようね!

耳を塞ぎたいが、そういうわけにもいかず、黙って聞く。

「実はね、七十年前、聖女がお隠れになる少し前……ほとんど同時期に教皇が亡くなっていたんだけど、教皇はね……」

皇后様が小声で呟いたのは、衝撃の言葉だった。

「毒殺されたのよ」

毒殺!?

「それを知って、アタシはピンときたのよ。この毒殺には、悪魔が関わっているってね」

そういえば、随分前から悪魔は帝国に入り込んでいましたものね。しかも聖なる力を持つ教会は、悪魔にとつて邪魔な存在だったはず。皇族を操あやつって、教会に介入し、力を削そいでいったとしてもおかしくないですわ。

「ほら、以前、黒蝶花は五百年前、白い聖なる花だったって話したこと覚えてる?」

「はい。確か当時の皇帝に嫁いだ聖女様が、そのお力で咲かせたと……」

「そう。花が黒で染まったのは、ある皇族が花の咲く土地を、魔物の血で汚けがしたからだって話したわよね?」

その言葉に頷くと、皇后様は続けてこう言ったのだ。

「その事件、八十年前に起こったことなのよ」

「え……八十年って……教皇が毒殺されたのは、七十年前ですわよね……」
まさか……っ。

皇后様は子供たちに聞こえないよう、ますます声を潜ひそめる。

「黒蝶花の毒は、摂取してもすぐには効果を表さず、徐々に身体を蝕むしばんでいく、遅効性の毒。それを作り出し、教皇と聖女に摂取させたとすれば……」

ほぼ同時期に、聖女と教皇が亡くなり、そこからずっと、聖女は誕生していない……。皇后様のおっしゃる通りに、悪魔が関わっていた可能性が高いですわ。

「そして現代に、フロちゃんという聖女と、ペーちゃんという教皇が生まれた。これって、できすぎよねえ」

そうか。これはきつと――

「聖女と教皇、そして英雄ノアは、悪魔に対抗するために神々によって生み出された存在だったのですわ。本来はイーニアス殿下も」

焰神に最も愛されたグランニッシュ帝国初代皇帝アントニヌス。そして、水と風の神に愛された弟ウィルス。光の神に愛されたアヴェエラルド。神々からの寵愛を受ける三兄弟が悪魔に弄ばれている状況を、神々が看過できるはずもない。

「それって、千五百年かけて、神々が悪魔を倒すために、あの子たちを同時期に誕生させたってこと？」

「そのとおりです。ですが、悪魔の策略でイーニアス殿下が堕ちてしまった。だからわたくしを主軸に、世界を回帰するしかなかったのではないのでしょうか」

などと考察していた時だ――

『アス、このかぎのから、みたことある！』

アカの大きな声により、話が中断する。

なにかあったのかしら？

「がら？ うむ。そういえばどこかで……」

「なんだったかちら？」

イーニアス殿下とノアが目をパチパチさせながら顔を見合わせている。

『あ!! ちかめいきゅうの、しんでん、たからもの、とびらの、がら!』

アカが思い出したように声を上げ、殿下とノアは揃って首を傾げた。

「にゃ？」

一步遅れて、ペーちゃんが同じように首を傾げる。

あらあら、可愛いミーアキャットの兄弟を見ているようですわ。

ペーちゃんの鍵を覗き込みながら、なにやら考え込んでいる子供たちのそばに寄ると……

「あつ、そつくりなの!」

「ほんとうだ。もしかしたら、しんでんと、かんけいあるのかもしれない」

どうやら、ペーちゃんの持つ鍵の柄が、地下迷宮の神殿に係る柄に似ているらしい。

「そうだ! あかいとりさんに、きいてみよう!」

「え? 赤い鳥さんって、もしかして……」

イーニアス殿下はそう言っつて、先日呼び出したように、また念話を使い、焰の神殿の珍獣を呼び出している。

『今度はなんだ、イーニアス! わしは先日、散々なことを言われて傷心中なのだぞ!』
殿下の呼び出しにすぐに反応した珍獣が返事をする、殿下は嬉しそうに話し出した。

「あかいとりさん、ペーちゃんのかぎについて、おしえてほしいのです」

『話を聞けい! ん……? ペーちゃんの鍵とな?』

今回は珍獣も、一応わたくしたちに聞こえるように会話をしてくれている。前回、皇后様たちにお説教されたことが相当応えたようだ。

「はい。このかぎのからが、しんでんの、まほうじんのがらに、にているのです」

『魔法陣と同じ柄の鍵？ ……うーむ、なんだったか……』

魔法陣と同じ柄ということに引つかかったようで、珍獣はうんうんと唸うなっている。

『そんな鍵があったような、なかったような？ 何千年も前のことすぎて思い出せん……』

「しんでんのなかの、おへやのかぎではありませんか？」

はつきりしない珍獣に、殿下も焦じれたように聞き返す。

『神殿内にそんな部屋があったか……？ いや、あつた気もする』

そんな忘れるくらいの軽いものなのかしら？ 何千年も生きてるようだし、仕方ないのかしら。

『うーん……、まあ、たいしたものではないわ！』

赤い鳥さんはかなり大雑おおざっぱ把ばな性格のようだ。

イーニアス殿下のように器の大きな人でないと、長く付き合えないですわ。それを思うと、殿下と珍獣の出会いには運命的でしたのね。

「また、そちらにおうかがい、したときに、かぎのへやを、さがしてもいいでしょうか？」

『もちろんだ！ この神殿はすでに管理者であるイーニアスのもの。好きにせい！』

二人は、まるで孫とおじいちゃんのように、楽しそうにお喋しゃべりしている。皇后様もそんな様子を微笑ましげに眺めていた。

「アスでんか、わたしも、さがしたい！」

「ぺえちゃ、みよ！」

「うむ。みなで、いつしよにさがそう！」

あらあら、ノアだけでなく、ペーちゃんまで神殿に行こうとしておりますわ。

「こほんつ。ノア、お母様とのお約束は忘れておりませんわよね？」

「おやくしよく！」

ノアはハツとしたようにわたくしを見上げ、姿勢を正す。

「おかあさま。アスでんかと、ペーちゃんと、ち……、しんでん、いつてもよろちいでしょーか」
くっ、可愛いですわ！

行動を起こす前に必ずわたくしかテオ様に相談するという約束を思い出したノアは、わたくしの足元までやってきて、可愛らしくおねだりしてきたのだ。ですけど――

「ノアには焰神の加護はありませんわ。西の神殿は、焰神の加護がないと命の危険があると聞きました。ノアが行く許可はできません」

「しよんな……」

「ちよ、にゃ……っ」

いくら可愛くとも、そんな危険な場所に行くなんて、許可できるはずありませんわ。

『それならば安心していいぞ！ 畏おそならば、管理者であるイーニアスが許可すれば、発動せんからな』

ええ!?

赤い鳥さんの言葉を聞いた二人の表情が輝き、イーニ阿斯殿下を期待した目で見つめる。

これは、止められませんわね……

子供たちの様子に、わたくしは諦め^{あきらめ}の溜め息を吐く。皇后様も苦笑いで子供たちを見ていた。

「アスでんか、しんでんはいる、きよか、ください」

「うだつちやーい」

「うむ。それならば、ペーちゃんとノアが、しんでんにはいるのを、きよかする！」

イーニ阿斯殿下は、嬉しそうに宣言したのだ。

「おかあさま、きけん、ないのよ」

「にゃい！」

ノアとペーちゃんが、これならどうだ！ とドヤ顔をしてくるので、「仕方ありませんわね」と

二人の頭を撫でた。

「やったー！」

「にやっちゃー！」

「うむ。やったな！ ふたりとも」

大喜びする子供たちを、こうして親離れしていくのかしら……なんて少し寂しい気持ちで見守る。どうか、さすがに赤ちゃんのペーちゃんは難しいのではなくて？

鍵騒動が一段落つき、わたくしの横ではペーちゃんとノア、イーニ阿斯殿下が楽しそうに遊んでいる。ペーちゃんは猫のような声を上げて、きゃっきやと笑い、大変可愛らしい。

なんだか、初めて紙芝居を読んであげた時のノアを思い出してしまいましたわ。

「そういうえば、ペーちゃんは未来がわかるのかしら？」

「え？」

皇后様が突然、そんなことをおっしゃったので、視線を向ける。

「だって神託は、『夜の帳^{とまゆ}が下りる時、全てを見通す瞳持つ赤子立つ。その者未来を知り、信心なる者を導く』じゃない？ その者未来を知りつて、あるんだから、ペーちゃんには未来が見えるのかしら、つて思ったのよ」

言われてみれば……？

「そう考えると、なんだか人生をやり直したイザベル様みたいね！」

「え？」

「だって、同じ人生を二度歩んでいるなら、この時はこんなことが起きたってわかるわよね？」

皇后様の言葉に息を呑む。明るい声なのに、真剣な眼差しでドキリとした。

「それは……、ただ、一度目と全く同じかと言われると、やはり自身の行動によって変わってきたので、未来がわかるとは言いがたいような？」

皇后様は一瞬ペーちゃんを見ると、わたくしに視線を移し、かぶりを振る。

「それもそうよね！」

などと笑っているが、もしかして皇后様も、わたくしと同じことを考えているのだろうか？

回帰の主軸ということわたくしは前世を覚えておりますけれど、回帰したのはこの世界そのものですね。その中でわたくしと同じように前世を覚えている人がいないとは言い切れませんわ。もしかしてペーちゃんは……

改めてペーちゃんを見つめる。

「によあ、ペえちゃ、もちゃ、あっちゃい」

「ペーちゃん、あのおもちゃで、あしよびたいのね」

「あーい」

……うーん、あの可愛いペーちゃんが、前世を覚えているとは思えないのだけれど。

「ペーちゃん、これ、ちよつとむじゅかしーかも、しれないの」

「にゃ！ ペえちゃ、じえちう！」

「ペーちゃん、できるの？」

「あい！」

すごいドヤ顔ですわ……。やっぱりペーちゃんは赤ちゃんね。前世は覚えていませんわ。

わたくしはそう確信したのだ。

『『未来を知り』』ということは、たとえば未来予知ですとか、なにかを介して知る。ということか

もしれませんわ」

「……そうね。前世の記憶がある人間がそうそういるわけないわよね。まあ、未来予知だとしても、すごい能力だけどね」

「そうですわね」

ホホホッと二人で笑い飛ばす。

「オホホ……ん？ 神託があつたのって、七十年前よね？」

「はい。そのようですわ」

皇后様がわたくしをじつと見る。

「七十年前なら、イザベル様も生まれていない……いやいや、まさかね……」

そう呟くと、首を横に振る。

「皇后様？」

「いえ、なんでもないわ」

皇后様、どうされたのかしら？

顔を引きつらせる皇后様を見て、わたくしは首を傾げたのだった。

第二章 聖女と父

SIDE ドニーズ ～シモンズ伯爵家タウンハウス～

「——ではオリヴァー様、私は教会に行つて参ります。私がない間、研究室には籠こもらさず、きちんと伯爵家の仕事をしてくださいね」

「う……わかつているよ、ドニーズ。気を付けて行ってきてくれ」

「はい。娘——フロレンスのこと、どうぞよろしくお願いいたします」

早朝、シモンズ伯爵家のタウンハウスの玄関先で、この家の跡取り息子であるオリヴァー様に外出の挨拶をする。いつもの外出とは違い、本日はシモンズ伯爵の名代として、教会に聖水をいただきに行くため、このように仰おんづ々しい形となった。

「もちろんだよ。フロレンスと留守番しておくから」

オリヴァー様の笑顔に安堵したところで、肩に下げていた大きなバッグがずり落ちた。それをかけ直し、まだ部屋で寝ている娘を思う。

「あ、寄付金はちゃんと持っているよね？」

「もちろんです。聖水をいただきに参りますので、このバッグの中に入れていきます」

「うん。お使いを頼んでしまつてごめんね。僕が行けばいいのだけど」

庶民であれば無料で貰える聖水も、貴族だと寄付金が必要になる。といっても、貰う都度ではなく、一年に一、二回寄付すればいいので、教会が暴利むさを貪むさっているわけではない。

「これも仕事のうちですから、問題ありませんよ。それに、街に行くついでですから手間でもありません。このようなことを主人にさせるわけにはいきませんから」

常備薬としての聖水を貰いに行くのは使用人の仕事で、当主やその家族が行くものではない。教会も、貴族の対応に手間を取られるのは避けたいし、貴族も聖水を貰いに行くために当主や家族がわざわざ出向くことは体裁が悪い。ただ、教会の立場もあるため、ただの使用人ではなく、当主の名代として行くことが一般的だ。

「ありがとう。よろしく頼むよ」

「はい。では、行つて参ります」

使用人用の馬車、といつても新型馬車だ。普通の貴族の馬車より余程乗り心地のいいそれに乗り、出発する。空には暗雲がかかつており、今にも雨が降りそうだ。

「用事をさつさと終わらせて、早く帰つてこないと」

フロレンスが寂しがって、泣かないといいんだけど……

遠くで雷が鳴る音が聞こえる。土砂降りにはならないよう祈つた。

「まずはベル商会に行つて、ゴムについての商談をしてから、教会かな」

シモンズ家から支給された、紙のメモ帳に目を通す。こんな贅沢なもの、一般的な貴族家ではなかなか手に入らないだろう。それを、シモンズ伯爵家は使用人に支給するのだ。とんでもないことなのだが、シモンズ家ののほほんとした人々はそれに気付いていない。そこが彼らの長所でもあるが、たまに心配になる。

「どうせなら街でフローレンスにお菓子やおもちゃも買つてあげたいなあ。あ、服やブローチなんかもいいかも！」

我が家は妻に先立たれた父子家庭で、少し前までは仕事すらなかった。幼い娘を家に置いておけず、かといつて子供と一緒にいける仕事などあるわけもなく、蓄えを取り崩す貧乏生活だった。だけど、シモンズ伯爵家に拾ってもらつて、全てが変わつた。まともな生活ができるようになっただけでなく、フローレンスとの時間もきちんと作れるようになったしね」

「フローレンスに洋服やおもちゃも買つてあげられるようになったしね」
フツツ、と笑いながら、妻に似た我が子を思い浮かべる。

「こんなに幸せで、大丈夫かな……」

幸せの反動が怖いとこぼす小心者の僕を、妻はよくからかっていたつけ。

「ドニーズさん、もうすぐ商会に着きますよ」

「うん。ありがとう」

御者に返事をしたあとメモ帳を閉じ、気を引き締める。

ベル商会は、オリヴァー様の実姉であるデイバイン公爵夫人が総取締役を務める商会だ。シモンズ伯爵家にとつて決して失礼があつてはならない、重要な取引先でもある。できたばかりの商会だけど、近いうちに世界のトップに立つことは間違いないだろう。

僕には似つかわしくない立派な馬車も、立派な洋服も、オリヴァー様が仕立ててくれた。その期待に^{こた}えなくては！

『あなた、気合い入れていきなさい！』

何度もそう言つて見送つてくれた亡き妻を思い出し、手を握る。

「よし！ 頑張るぞっ」

品のいい屋敷の敷地内に馬車が停まる。僕は妻の思い出に背中を押されるようにして、馬車を降りた。

このベル商会の支部は元貴族の屋敷を改装しているらしく、とても立派だ。少し前にあつた貴族たちの大^{だい}粛^{しよく}清^{せい}の影響で、貴族街にあるお屋敷が空家であることは珍しくない。そこを安く買い、事務所にしたベル商会はさすがと言わざるを得ない。『おもちゃの宝箱』帝都支店の隣もちょうど空家になつたとかで、店の二階にあるカフェを、隣の建物に移設する予定だと聞いた。

フローレンスもカフェを気に入っているし、広くなると、行きやすくなるだろうから、楽しみだなあ。

商会の一階は、部屋の壁を取っ払ったらしく、広々としていて、とても開放的だ。ところどころに植物が置かれたそこに、座り心地の良さそうな大きなソファや、立ったままでも使用できる机が並ぶ。床の一部は円形にくり抜いたように低くなっていて、段差に座ることで皆で丸くなって会議ができるようになっていた。斬新で洒落た空間は、とても未来的だ。

ちなみに二階には、個室の商談部屋が並ぶ。

「ドニーズ様、お待ちしております」

受付の女性が、入り口の扉に立った僕を見つけて、にこやかに声をかけてきた。

「こんにちは。相変わらず、こちらの事務所は……すごいですね」

広々とした空間の中、大勢のスタッフが行き来したり、座って飲み物を飲みながら仕事をしていたり、他の商会では見たこともない働き方をしている、初めて来た時は本当に驚いたものだ。

「いつも皆さん生き生きしていて、とても楽しそうに働いていらつしやる」

「お褒めいただき光栄です」

受付の女性は嬉しそうに微笑むと、「こちらへどうぞ」と二階の奥の個室へ案内してくれた。

僕らシモンズ伯爵家との商談は、ベル商会でも特別なものだ。なにしろシモンズ伯爵家が提供する新素材は、ベル商会の要と言ってもいい。だから、声が漏れない防音性の高い奥の個室で商談するのが常だ。扉の前には警備の人もいて、安全性も高い。

「ドニーズ様、ご無沙汰しております」

部屋の中にいたのは、予想外の人だった。

「会頭!? 本部にいらつしやるのでは……?」

「実は、帝都に用事ができたので、こちらへ寄ったら、これからドニーズ様との商談だと聞かされました。ご同席したく思い、この場に参りました」

ベル商会の会頭は四十代の女性で、元々ダイバイン公爵家のタウンハウスで会計士として働いた方だ。実は僕の元上司。といっても、僕が働き出してほどなくして、結婚退職されたので、ともに働いた期間は短い。とても人当たりのいい、しかし数字にはめっぽう強い、優秀な方である。

「そうでしたか。私も会頭とゴムの件でお話を詰めたかったので、僥倖でした」

高級なソファに向かい合って座り、心の中で気合いを入れる。この人は、一筋縄ではいかない。

「商談の前に、美味しいお菓子でもいかがですか?」

「いただきます。新作ですか?」

「はい。おもちゃカフェで、期間限定で出す予定なのですよ」

こうして、戦いの火蓋が切られた。

「——では、そうにお願いたします」

「はい。本日は有意義な時間をありがとうございます。ドニーズ様」

場数を踏んでいるこの人には、なかなか勝てない……さすがはベル商会の会頭。とはいえ、こ